

## 近代化する福岡市におけるキリスト教

塩野和夫

### はじめに

明治新政府は近代化を推進した。その結果、日本社会は明治期に多様な変革を経験する。アメリカンボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions, AB) の宣教師 J. D. デイヴィス (Davis, J. D., 1838-1910) は日本に到着した1871 (明治4) 年12月1日から1年間の出来事を分析し、「身分制度の撤廃・鉄道の開通・混浴の禁止・教育体系の計画・太陽暦の採用」などを挙げ、「その1年間はこの国における大きな変化の年でした」と総括している。

すでに江戸幕府がアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスと調印した修好通商条約によって、1859年以降締結国住民が居住できる居留地を開港地に設けていた。各国の海外宣教団体は神奈川 (横浜)・長崎・函館などの居留地に次々と宣教師を送り、宣教活動再開の時に備えていた。

ところで、日本社会の近代化は欧米社会の制度と文明の受容を内容とした。欧米各国においてキリスト教は文明や社会制度の根底にあり、両者は密接に結びついていた。したがって、近代化される日本社会を宣教師は宣教活動に好ましい場と考え、キリスト教禁止を告知する高札が撤去された1873 (明治6) 年2月以降、キリスト教活動を活性化した。

ところがその頃、宣教師が福岡・博多に足を運ぶことはなかった。九州有数の都市でありながら、明治初期における政治的混乱のため敬遠されたからである。ようやく福岡・博多でキリスト教活動が認められるのは、1880年代に入る頃からである。それ以来、近代化されていった福岡市においてキリスト教は何

であったのか。明治期・大正期で検証する。

## 1 変革に遅れた福岡・博多とキリスト教 — 明治前期 —

### (1) 混迷する福岡・博多

幕末から明治初期の福岡・博多はどのような町であったのか。1812（文化9）年写「福岡城下町・博多近隣古図」<sup>2)</sup>は、畑の広がる中島町（現在の「中洲」）を挟んで西に城下町である「福岡市中」、東に商人の町である「博多津中」をそれぞれ独立した町として描いている。この形態を継承して、1872（明治5）年に実施された大小区画制においても福岡を1大区、博多を2大区としている。このようにそれぞれに個性ある福岡・博多の町を舞台にして幕末から明治初期にかけて激動する出来事が次々と起こった。

1834（天保5）年に第11代福岡藩主となった黒田長博は開明的君主であった。彼は製錬所を建設して大砲を作り、帆船日華丸・蒸気船大鵬丸などを購入して海軍を保持し、各地に砲台を築いて海岸防御態勢を強化するなどした。しかし、藩内にくすぶっていた保守派と勤皇派の対立は1860年代には激化して抜き差しならない事態となっていた。1865年、黒田長博は保守派の立場を鮮明にして、勤皇派を大量に検挙し加藤司書たちを自害させた。ところが、そのわずか2年後に徳川慶喜は大政を朝廷に奉還し、1868（明治元）年には明治新政府が成立する。幕末における黒田藩の目論見は外れ、久野将監ら三家老は新政府の圧力を受けて自害した。

新政府軍と旧幕府軍が戦った戊辰戦争に、福岡藩は新政府軍に参加して出兵した。その間1869（明治2）年に家督を継いだ黒田長知は福岡藩初代知事となった。彼が直面した課題は逼迫した財政問題である。幕末から窮乏していた藩の財政に戊辰戦争への出兵が追い打ちをかけた。福岡藩はこの事態を太政官札の贋札製造で乗り越えようとし、城内でひそかに偽札を製造した。ところが、これが政府の知るところとなり、関係者は逮捕されて厳しく詮議された。1871（明治4）年7月に下された処分は藩首脳5名の斬刑、知事黒田長知の罷免・

閉門であった。当時、贋札製造で処分されたのは福岡藩だけである。なお、知事の後任として、有栖川宮熾仁親王が任命された。

明治維新の変革に乗り遅れた福岡県の士族・民衆には新政府に対する不平不満が鬱積していた。1873（明治6）年6月に政府の政策に異議を唱えて一揆をおこしたのは農民である。筑前竹槍一揆と呼ばれた運動には県下から10万人といわれる参加者があった。彼らは福岡・博多の町にあふれ、県庁を打ち壊し、官舎に放火した。筑前竹槍一揆終結後、1877（明治10）年3月に西郷隆盛に呼応して立ち上がったのが、越智彦四郎・武部小四郎率いる福岡士族である。彼らは東部隊と西部隊に分かれ、県庁や福岡城を攻撃する予定であった。ところが、事前に蜂起の動きを察知した政府軍によって東部隊のほとんどが捕縛された。西部隊は福岡城を攻撃したが敗退し、秋月で壊滅した。5月に越智・武部たち首謀者の5名は死刑、関係者400名あまりが懲役刑などを受け、福岡の変は終結した。

## (2) キリスト教と出会った人々

明治初期に福岡・博多における海外宣教団体の本格的な活動着手は、九州の他地域に比べて遅れた。日本聖公会系の海外宣教団体<sup>3)</sup>の場合を見ておこう。アメリカ監督教会宣教会（Domestic and Foreign Missionary Society of the Protestant Episcopal Church in the USA, PE）は1859年に二人の宣教師、J. リギンズ（Liggins, J., 1829-1912）とC.M. ウィリアムズ（Williams, C. M., 1829-1910）を長崎に派遣した。1869（明治2）年に来日し長崎におけるPEの活動を継承し発展させたのは、イギリス教会宣教会（Church Missionary Society, CMS）のG. エンソル（Ensor, G., 生年不詳-1911）である。活動が充実した長崎を拠点に、H. モーンドレル（Maundrell, H., 1840-96, CMS）は1878（明治11）年春に熊本・佐賀・鹿児島に巡回伝道活動を広げた。A. B. ハッチンソン（Hutchinson, A. B., 1841-1918, CMS）が長崎から福岡・博多における活動によりやく着手したのは、1885（明治18）年である。しかしこの間、他の地域であるいは別の宣教活動でキリスト教と出会っていた福岡県人がいた。

まず、二川一騰（1845/48-1930/34）である。福岡県大入村（現在の「福岡県糸島市」）で1840年代半ばに浄土真宗の寺に生まれ育った二川は、反キリスト教思想に共鳴して長崎へ向かう。1年半ほどパリ外国宣教会（Societe des Missions Etrangeres de Paris）のB. T. プティジャン（Petijean, B. T., 1829-84）からカトリック教理を学んだ後に、彼はイギリス領事館に務める。1869（明治2）年に来日間もないイギリス教会宣教会のG. エンソルと出会い、二川は彼の日本語教師となる。他方、エンソルは二川に聖書やキリスト教書を教えたが、彼を通して二川はキリスト教信仰を持つ。当時は禁教下であり、エンソルの周辺には絶えず官憲の眼が光っていた。それでも二川は断固とした決意をもって、しかし慎重に同年11月にエンソル宅の一室で洗礼を受けた。彼の教名はルカであった。ところが、二川の受洗は官憲に知られ、1870（明治3）年3月に捕縛される。その後、長崎・福岡・中津・大阪・東京と各地の留置場に送られ、きびしい詮議を受けた。しかし、彼は信仰を捨てず、1873（明治6）年には釈放されたのである。二川にとってキリスト教との出会いは何であったのか。それは優れて主体的で実存的な決断に基づき、従来の生き方を変えるものであった。その後いくつかの教派を渡り歩きながらも、二川一騰はキリスト教信仰を生きぬいた。

福岡の変に参加したため、政府軍に捕縛された者の中に多くの青年がいた。彼らは純粹に明治新政府の諸政策に反発して日本の将来を憂い、あるいは西郷の蜂起に可能性を信じて将来をかけた者もいた。那珂郡春吉村（現在の「福岡市博多区春吉」）の長瀬半次郎もそのような一人である<sup>4)</sup>。福岡の変で越智の指揮下にあった長瀬は捕えられ、臨時裁判によって1877（明治10）年5月1日に「兵器ヲ弄シ官兵ニ抗スル科」を問われ懲役2年の刑を言い渡された。36名の受刑者が服役したのは宇治野村監獄（現在の「神戸市中央区」）であり、36名中10名が病死した劣悪な環境であった。ところがその頃、アメリカンボードの宣教師や神戸英和女学校（現在の神戸女学院）関係者たちが服役者を慰問しキリスト教を伝えていた。はじめてキリスト教に出会った服役者の中には熱心にキリスト教を求める者もいた。長瀬もそのような一人である。だが、彼に残さ

れた地上の時はあまりにも短かった。1878（明治11）年11月25日に、刑期を半年残して、彼は29歳の生涯を閉じる。しかし、最期にキリスト教を受け入れ、安らかに死に向かった長瀬半次郎の姿は仲間たちを深く感動させた。

福岡でのキリスト教活動が1878（明治11）年12月1日から3日にかけて行われたことを『七一雑報』<sup>9)</sup>は伝えている。記事によると、その頃福岡にキリスト教関係者を招く人々がいた。その一人、「漸強義塾を師範」した女教師高場乱（1831-91）はキリスト教を学ぶ意志も持っていた。政治的混乱を繰り返した福岡・博多の町にも、福岡の変後にはキリスト教に期待する人々が現れ始めていたのである。招きに応えたのはアメリカンボードの宣教師J.L.アッキンソン（Atkinson, J. L., 1842-1906）とJ.C.ベリー（Berry, J. C., 1847-1936）、彼らを案内した山田良斉である。なお、ベリーは宣教医であり、宇治野村監獄を慰問し重病になった服役者を診療している。宇治野村監獄において診療するベリーの様子が福岡の関係者に伝わり、医療関係者が強い関心を持っていた可能性がある。活動内容は講義と診察であった。講義については、「12月1日高木氏の周旋によって講義す聴衆二十五人」、「2日向陽義塾にて説教す聴衆四百人余」、「（3日）12時よりこの塾（漸強義塾）にて説教す聴衆三百人」と報告されている。福岡での集会は自由民権運動を担った団体、向陽義塾・漸強義塾と関係が深く、かなりの人数を動員していた。診察を受けた者は60名余りである。欧米文明が福岡・博多に入り始めたころ、西洋医学への期待があり、それがキリスト教と結びついたのであろう。

アメリカ（オランダ）改革派教会（Reformed Church in America [Dutch], RC）のH.スタウト（Stout, H., 1838-1912）が、長崎で1873（明治6）年9月に初めての洗礼を3名の青年に授けている。その中の一人隈部癖は福岡の出身であるが、その後については分からない。

### (3) 初期のキリスト教活動

明治前期の福岡・博多で初めて地域に定着したキリスト教活動が行われたのは、ほぼ1880年代に入ってからである。活動開始の順序に従って、組合基督教

会・メソヂスト教会・聖公会（以上、プロテスタント）・パリ外国宣教会（カトリック）の場合を概観し、その特色を述べる。

神戸の宇治野村監獄で服役していた大神範造・安永壽たちは、長瀬半次郎の安らかな死に感動し福岡でのキリスト教会設立への願いを強くした。それを知った同志社創立者新島襄はキリスト教伝道に先立って英学校の設立を勧める。1879（明治12）年9月に刑期を終え福岡に帰った大神・安永たちは、英学校設立のため奔走する。しかし、幻はかなわず同年12月に日本基督伝道会社（組合基督教会の前身）より、不破唯次郎

（1857-1919）伝道師を迎える。不破は当初早良郡原村（現在の「福岡市早良区原」）に住むが、1880（明治13）年3月に福岡本町6番地（現在の「福岡市中央区舞鶴」近辺）に移り講義所を開設した。1881（明治14）年3月に講義所は福岡橋口町46番地（現在の「福岡市中央区天神」）に移転、1885（明治18）年6月には福岡呉服町21番地（現在の「福岡市中央区大名」）に新会堂を建設して、献堂式と教会設立式を行った。福岡組合基督教会（現在の「日本基督教団 福岡警固教会」）である。この時、不破は按手札を受け牧師となっている。

アメリカ・メソヂスト監督教会（Methodist Episcopal Church, MEC）宣教師のC.S. ロング（Long, C. S., 1850-90）は、1880（明治13）年の来日以来、長崎を拠点に活動していた。1884（明治17）年10月30日に福岡に教会と学校を設立する目的をもって、ロングは谷川素雅を伴い博多津に上陸した。翌日、仮会堂として福岡呉服町8番地（現在の「福岡市中央区舞鶴」）に、英学校として福岡浜町13番地（現在の「福岡市中央区舞鶴」）に借家する。11月2日には浜町で初めての礼拝を執行し、12月7日には呉服町の仮会堂で礼拝を行なった。福岡美以美教会（後の「日本メソヂスト福岡教会」、現在の「日本基督教団 福



図1 近代福岡で最初の定住伝道者  
不破唯次郎  
（共愛学園百年史編纂委員会編  
『共愛学園百年史』口絵、所収）

岡中部教会』)である。谷川は1885年1月に英学校・羔血義塾を浜町に開設し、竹内磯雄(後の安部磯雄)を教師とした。羔血義塾は3月に呉服町8番地に移転、同日教会は下名島町(現在の「福岡市中央区天神」)に移転した。長崎にいたロングは活水女学校のJ.M.ギール(Gheer, J. M. 1846-1910)に福岡での女学校開設を依頼した。ギールは5月18日に呉服町の仮会堂に女子学校を仮設して生徒を募集し、24日に福岡因場町31番地(現在の「福岡市中央区天神」)に移転した。福岡英和女学校(現在の「福岡女学院」)の創立である。

イギリス教会宣教会(CMS)は、1869(明治2)年にアメリカ監督教会宣教会(PE)の長崎におけるキリスト教活動を継承した。その後、1878(明治11)年には熊本・佐賀・鹿児島に活動を広げている。CMS宣教師A.ハッチンソンが来日し、長崎での活動に従事したのは1882(明治15)年である。ハッチンソンは1885(明治18)年に福岡での伝道活動を始めるため、津田応介を伴って長崎から福岡に転任した。その頃、渡辺保治も佐賀から福岡に転任している。彼らは1886(明治19)年に福岡荒戸1丁目(現在の「福岡市中央区荒戸」)に講義所を設けた。講義所はその後福岡橋口町(現在の「福岡市中央区天神」)に移転、1891(明治24)年には福岡須崎裏町(現在の「福岡市中央区天神」)に購入した土地に会堂を建築している。日本聖公会福岡アルバ教会(戦後「日本聖公会 福岡教会」と「日本基督教団 福岡城東橋教会」に分かれた)である。この時、ハッチンソンはイギリスで会堂建設のため募金を集めていた。

カトリックではパリ外国宣教会が日本宣教を担当した。宣教師は長崎における活動を1863年に始め、1864年には大浦天主堂を落成した。その大浦天主堂で1865年に潜伏キリシタンを発見し、浦上では秘密の集会を開いた。集会を発見した江戸幕府は1867年に浦上四番崩れを起こしたが、1868(明治元)年明治新政府は禁教政策を続け、キリシタンの流罪処分を継続し拡大した。そのため、長崎におけるパリ外国宣教会の活動は配流された信徒への対策と近隣地域のカクレキリシタン捜索が中心となった。神父E.ラゲール(Reguet, E., 1854-1929)が助手1人と伝道士2人を伴って福岡へ派遣されたのは1887(明治20)年である。福岡では橋口町(現在の「福岡市中央区天神」近辺)あたりに借家して教

会とし、宣教活動を始めた。現在の大名町カトリック教会である。活動は主に各地で開いた講演会であった。3年間の福岡在任中にラゲーは36名に洗礼を受けている。

明治前期の1880年代に福岡・博多で初めて着手されたキリスト教活動にはいくつかの特色がある。まず地域である。講義所が設置された本町・橋口町・荒戸町・須崎裏・呉服町・浜町・下名島町はすべて福岡にあり、原は福岡近郊の村であった。博多には講義所が全くない。これは幕末から明治初期にかけて激動した城下町福岡にキリスト教に耳を傾ける少数の人たちがいた事実と対応するのではないか。そこで、第2に1880年代に入ると福岡にキリスト教宣教者を招く人々が現れていた事実である。顕著な事例は組合基督教会である。宇治野村監獄で長瀬の死に感動を受けた大神・安永たちは福岡に帰ると、キリスト教を故郷に伝えるために奔走し不破伝道師を招いた。メソヂスト教会の場合でも福岡にロングと谷川を迎えた人たちがいた。さらに、早くから教育活動に着手し、キリスト教宣教に教育活動の場を与えた特色である。典型はメソヂスト教会で、彼らは博多津に上陸すると早速仮会堂と英学校のための家をそれぞれに確保している。西欧化が進む福岡でキリスト教はとりわけ教育分野で責任を担おうとした。それは教育活動が人格的感化を与え、しかも人的つながりを構築できたからである。

## 2 近代化する福岡とキリスト教 — 明治後期 —

### (1) 福岡市の成立と近代化

1889（明治22）年4月1日に市制の実施により、福岡区は福岡市になった。福岡市の成立である。その時の人口は47,627人であり、地域別の内訳は福岡が20,410人、博多が25,676人、その他が1,570人であった<sup>9)</sup>。地域別人口で博多が福岡に勝っていた事実もあって、議会は市の名称に「福岡」と「博多」のいずれを採用するかをめぐって紛糾した。なお、この年に福岡県下で市制を実施したもう一つの都市は久留米市である。



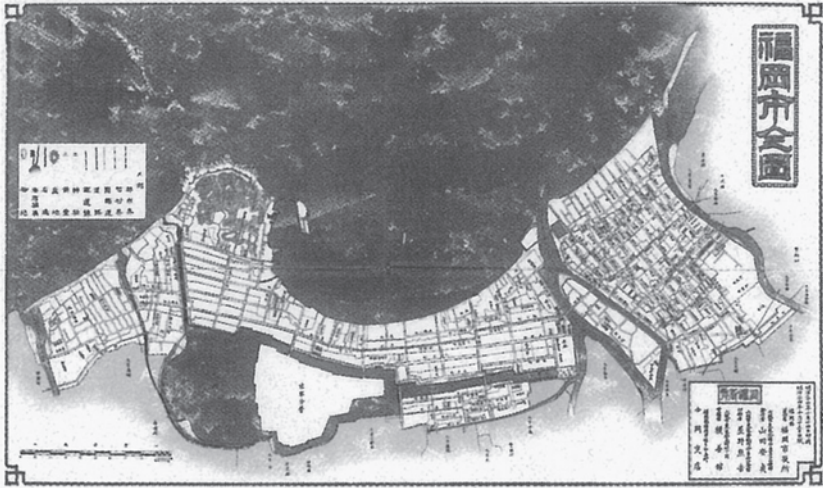


図2 市制実施当時の福岡市全図  
(福岡市著作『福岡市全図』明治24年10月15日出版)

明治前期に福岡の近代化は、政治的混乱はあったが、着実に進んでいた。郵政制度の実施により、1871（明治4）年に福岡箕子町（現在の「福岡市中央区大手門」）に郵便取扱所が設けられた。福岡・博多の町に人力車が流行したのは、1872（明治5）年である。学制の実施により、1873（明治6）年に福岡・博多には小学校が10校（当仁・大名・橋口・薬院・荒戸・西街・冷泉・春吉・住吉・堅粕）開校され<sup>7)</sup>、変則中学校も設立された。1876（明治9）年には天神に県庁が建設され、城内から移転している。

明治後期に入ると近代化がさらに進められ、福岡市は北部九州における政治・経済・交通・教育の中核都市としての輪郭を現わしている。1888（明治21）年設立の九州鉄道会社（現在の「JR九州」）は1890（明治23）年に博多－久留米間で鉄道を開通させると、1909（明治42）年には博多－鹿児島間を開通させた。福博電車が市内に路面電車を走らせたのは1910（明治43）年である。京都帝国大学福岡医科大学が1904（明治36）年に設立され、1910（明治43）年には工科大学と合わせて九州帝国大学（現在の「九州大学」）を創立している。

## (2) 新たに加わったプロテスタント各派

明治前期にカトリックのパリ外国宣教会、プロテスタントの組合基督教会、メソヂスト教会・聖公会が、主に福岡部でキリスト教活動を展開した。明治後期に入ると、福岡・博多の町で新たに参入した教派が加わり、さらに広範な活動を展開する。なお、参入した教派はいずれもプロテスタントである。

バプテスト西部組合（現在の「バプテスト連盟」）の後藤六雄（1860-1928）が福岡への出張伝道を始めたのは、1892（明治25）年4月である。講義所は箕子町に設けられた。1894（明治27）年4月にはアメリカ南部バプテスト協議会（Foreign Missions Board of the Southern Baptist Convention, SB）宣教師のE. N. ウォーン（Walne, E. N., 1867-1936）が福岡に定住、住所は福岡市西職人町71番地（現在の「福岡市中央区長浜」）だったと思われる。川勝勝弥や守屋トメがウォーンに協力した。同年、SB宣教師N. メーナルド（Maynard, N.）も来日すると、福岡に定住しウォーンに協力している。さらに1895（明治28）年1月に菅野半次が箕子町講義所で、同年11月には後藤六雄が西職人町の講義所で活動を始めた。また、佐藤喜太郎もこの頃、福岡市本町（現在の「福岡市中央区舞鶴」）に講義所を設けている。このようにして一時期、バプテスト派は市内各地で活発に活動を展開した。しかし、1895（明治28）年にはN. メーナルドがSB宣教師J. M. マッコラム（McCollum, J. W., 1864-1910）と入れ替わって福岡を去り、翌年にはウォーンと菅野が福岡を去った。1897（明治30）年には後藤が去っている。福岡に留まった佐藤は1901（明治34）年1月に箕子町10番地の家屋を購入して伝道所とし、同年10月に福岡浸礼教会（現在の「日本バプテスト連盟 福岡教会」）を組織した。1903（明治36）年10月、大名町に住んでいたマッコラムは自宅に神学塾を開設している。

日本基督教会（改革長老派）は、1891（明治24）年に鎮西中会を設置し九州全域を管轄した。早くも1892（明治25）年に柳川教会の笹尾が毎月1回くらい福岡・博多に出張し伝道した<sup>8)</sup>。1893（明治26）2月には久留米教会の逸見尚憲が出張伝道を始めたが、彼は同年5月久留米から福岡に転居し定住者として活動する。福岡・博多の2か所に講義所を設け、それぞれで礼拝・日曜学校・

祈禱会・聖書研究会などを開いた。1895（明治27）年ころには「福岡博多ノ中央」に講義所を設け、両部でのキリスト教活動を続けた。1898（明治31）年に福岡講義所の担当は坂文一に変わる。1906（明治39）年には自給独立を目指して福岡基督伝道教会と改称している。1908（明治40）年に新会堂の献堂式を挙行したが、場所は福岡天神3番地（現在の「福岡市中央区天神」）であった。ついに独立教会となり、教会名称を日本基督教会福岡教会（現在の「日本基督教団 福岡渡辺通教会」）と改称したのは1910（明治43）年である。

日本福音ルーテル教会が、福岡・博多における出張伝道を始めたのは1902（明治35）年である。この年、久留米教会員の木内千葉太郎が福岡に転勤した。そこで、木内宅で毎週木曜日に家族的集会和英語聖書研究会を開くことになった。講師として、佐賀教会からアメリカ南部一致ルーテル教会（Board of Foreign Missions of the US of the Evangelical Lutheran Church in the South, UL）宣教師のR. B. ピーリー（Peery, R. B., 1868-1934）が、久留米教会からはアメリカ一致デンマーク・ルーテル教会（American Evangelical Lutheran Church）宣教師のJ. M. T. ウィンテル（Winther, J. M. T., 1874-1970）と米村常吉が出張した。1905（明治38）年に福岡・博多は佐賀教会の管轄になったので、山内量平（1848-1918）が担当した。山内は大学病院に近い福岡市外千代町に講義所を設け、説教会・英語聖書研究会・大学病院伝道を行った。当時、UL 宣教師のC. K. リッパード（Lippard, C. K., 1871-1964）が協力している。山内は1906（明治39）年には福岡に転居し、福岡市大浜町3丁目（現在の「福岡市博多区神尾町」）を講義所として住み、日本福音路帖福岡講義所（現在の「日本福音ルーテル博多教会」）の看板を掲げた。同年6月に行われた講義所最初の洗礼式には5名の受洗者があったが、全員が大学病院の看護師であった。日曜学校もさかんで、大浜町本校の他に、千代町分校と馬出分校を開いていた。1908（明治41）年にはUL 宣教師のL. S. G. ミラー（Miller, L. S. G., 1881-1977）が着任し、山内を助けた。関係者が福岡実業学会を設立したのは1910（明治43）年であった。

明治後期における特色の1つは困難とされた博多部におけるキリスト教活動

である。特に日本福音ルーテル教会は博多部に講義所を設けた。こうして、明治期の福岡・博多の主要地域すべてにおいてキリスト教活動は展開されることとなった。

### (3) キリスト教活動の担い手

明治期の福岡・博多でキリスト教活動を担いあるいは重要な影響を与えたのはどのような人物であったのか。彼らの人間像に迫るために、その人間形成を中心に概観し、担い手に関する特色をまとめたい。なお、キリスト教活動に参加し、それを支えた地元関係者の分析が重要である。しかし、今回はそれについては言及しない。

明治期の福岡・博多における最初の定住宣教師は不破唯次郎（1857-1919）である。不破は肥後ノ国宅磨郡本山村（現在の「熊本市本山町」）に出生した。1871（明治4）年9月に熊本洋学校が開校すると、翌年9月に2期生として入学、L.L. ジェーンズ（Janes, L. L., 1837-1909）の薫陶を受けた。ジェーンズは欧米の最新文献を紹介するなど、当時としては先進的な教育を施した。熊本洋学校内で対立が起こると、不破はキリスト教による日本改革を主張する西教派に属して1876（明治9）年1月の花岡山奉教の盟約に加わった。彼がジェーンズから洗礼を受けたのは同年4月である。同年10月には同志社英学校に入学、在学中は下級生に英語を教えている。同志社英学校予科を卒業した1879（明治12）年に日本基督伝道会社より福岡・博多に派遣された。こうして、最初の定住宣教師となった。当時、不破は22歳であったが、すでに熊本英学校と同志社で9年間学び優れた英語力を有していた。福岡（在任 1879-86）ではもっぱら教会活動に専念したが、前橋教会（在任 1886-90）では1888（明治20）年に前橋英和女学校（現在の「共愛学園」）創立に協力し、初代校長に就任している。

C. S. ロング（Long, C. S., 1850-90）はアメリカ合衆国テネシー州アセス・マックミンに牧師の子息として出生した。1875年に東テネシー・ウェスレアン大学を卒業すると、ノースカロライナ州アッヒビルにある教会の牧師とキャンドラーカレッジの学長を兼務した。しかし、外国伝道への使命を感じ、1880

(明治13)年にアメリカ・メソヂスト監督教会より教育宣教師として日本に派遣された。長崎に到着したロングは外国人居留地東山手16番館(現在の「長崎市東山手町」)に住み、活動に着手した。教育活動にも従事していたロングは、1881(明治14)年10月にカブリー・セミナー(現在の「鎮西学院」)を東山手4番地に設立する。さらに1882(明治15)年に九州全域の責任者となると、1884(明治17)年10月30日に谷川素雅を伴って博多津に上陸、福岡で教会と学校設立の準備にあたった。この時ロングはわずか6日間の滞在であったが、それぞれの場所を確保し11月4日に長崎に帰っている。英学校である羔血義塾が設立されたのは、翌1885(明治18)年1月である。ロングはまた長崎の活水女学校創立者J.M.ギールに福岡での女学校設立を依頼し、1885(明治18)年5月の福岡英和女学校開校に至らせている。同年アメリカに一時帰国したロングは1886年に古代ギリシャ哲学の研究論文で哲学博士の学位を取得した。

E. ラゲー (Raguet, E., 1854-1929) は、ベルギーのトゥルネー司教区ブレヌ・ル・コントに出生した。1877年にパリ外国宣教会に入会する。1879年司祭に叙階されると直ちにフランスを発ち、同(明治12)年長崎に到着した。長崎県の伊王島、平戸、黒島、佐賀県の馬渡島などで、潜伏キリシタン末裔の司牧にあたった。1887(明治20)年、長崎教区長J.A.クーザン(Cousin, J. A., 1842-1911)司教の命を受け、明治期にカトリックとしては初めて福岡に定住し(在任 1887-90)、キリスト教活動に従事した。同僚の助手や伝道士とラゲーは地道に宣教活動に取り組んだ。当時、地域住民と交流する上で講演会が有効であった。そこで、橋口町の教会だけでなく、万町(現在の「福岡市中央区舞鶴」)・通町(現在の「福岡市中央区荒戸」)・唐人町(現在の「福岡市中央区唐人町」)でも民家の一室を借りて講演会を行った。ラゲーの流暢な日本語による講演は好評であったという。なお、ラゲーは1905(明治38)年から小野藤太(1870-1916)などの協力を得て新約聖書文語訳の翻訳作業に着手し、1910(明治43)年に刊行している。この翻訳は高い評価を得ている。

山内量平(1848-1918)は紀伊日高郡南部(現在の「和歌山県日高郡南部町」)に出生した。山内家は代々神官の家系であったので、父は彼に国学を教

えた。僧籍にあった義兄は漢籍を教えた。成人して神道教導の官位を取得する一方で、田辺藩校の修道館で教えた。その後、地域社会で巡査や村長など次々と公職に就いた。しかし、兄の死をきっかけに家業を継ぎ、酒造業と神職に励んだ。転機は1884（明治17）年に訪れる。植村正久と結婚した妹秋香の勧めや大石余平の導きにより神官山内量平が洗礼を受けたのである。地元で熱心な信仰生活を始めた山内は田辺教会の長老となる。1887（明治20）年には東京に転居し、築地教会・深川教会の長老を歴任、1888（明治21）年には築地神学校に入学している。1892（明治25）年にアメリカ・ルーテル教会宣教師 J. A. B. シェーラー（Scherer, J. A. B., 1870-1955）の、次いで R. B.

ピーリーの日本語教師となったのが、ルター派との出会いであった。1893（明治26）年にシェーラー、ピーリーと共に佐賀に移り、日本福音ルーテル教会の開拓伝道に従事する。1905（明治38）年には福岡・博多に移り、日本福音路帖福岡教会（在任1905-16）の基礎を築いた。彼の在任期間は12年に及んだ。

明治期のキリスト教活動の担い手に共通して認められる特色は、彼らの高い学識である。明治期は学制の実施により広く公教育を受けるようになったとはいえ、多くの人々は小学校で4年あるいは6年の義務教育を受けたにすぎない。そのような時に不破は熊本洋学校と同志社英学校で9年間の英語教育を受けていた。山内も早くから教育環境に恵まれ、若くして藩校で教えていた。C. S. ロングは哲学博士号の学位を受けているし、E. ラゲールの優れた著作は彼が高



図3 福岡での在任が12年に及んだ山内量平（福山猛編『日本福音ルーテル教会史』31頁、所収）

い学識の持ち主であった事実を語っている。しかし、福岡・博多における彼らのキリスト教活動は地道で堅実なものであった。彼らの学識が生かされる場面はあっただろうが、不破にしてもラゲーにしても山内にしても求められた働きを誠実に担い、教会の基礎を築いた。ただし、機会に恵まれば彼らの学識は文化的・教育的な成果を残した。ロングはわずかな間に羔血義塾・福岡英和女学校と2校を開設へと導いた。不破も前橋では仲間と協力して前橋英和女学校を設立し初代校長を務めている。ラゲーは新約聖書文語訳などいくつかの著作において優れた能力を発揮している。

### 3 拡大する福岡市とキリスト教 — 大正期 —

#### (1) 近代都市福岡の拡大

大正期に入った福岡市に継承された3大課題は、近接地域の併合による市域の拡大・交通網の整備・上水道の整備であった。これらの課題を着実に実現して、大正期の福岡は文化都市としての内実を備えていった。

まず、市域の拡大を跡付けておこう。福岡市は大正期に次々と近接地域を併合している。次の通りである。

警固村（1912〈大正3〉年、現在の「福岡市中央区警固」）

豊平村の一部（1915〈大正4〉年、現在の「福岡市東区馬出」近辺）

鳥飼村（1919〈大正8〉年、現在の「福岡市城南区鳥飼」）

西新町（1922〈大正11〉年、現在の「福岡市早良区西新」）

住吉町（1922〈大正11〉年、現在の「福岡市博多区住吉」）

八幡村（1926〈大正15〉年、現在の「福岡市中央区・博多区・南区」それぞれの一部）

これらの合併によって、福岡市の面積は1889（明治22）年の福岡市成立時に対して約5倍の26平方キロ、人口では3倍強の15万人余となった。

市域の拡大に伴って各種交通網の整備も進んだ。福博電車は順次市内における路面電車の軌道を拡張した。九州鉄道（現在の「西鉄」）は1924（大正13）年に福岡・久留米間の鉄道を開通した。1925（大正14）年には福岡・大阪間で定期飛行便が始まった。市内の主要道路整備が進むにつれて、自動車の利用も増えた。そこで、1926（大正15）年には福岡自動車学校が開校している。

明治期の課題であった上水道事業の着手に関しては、1913（大正2）年に内務省より付設認可が下りた。そこで、1917（大正6）年に水源工務所を設けて事業に着手、1923（大正12）年3月に曲淵貯水池を完成した。同年末の市内への上水給水戸数は7,245戸であった。

大正期に文化都市福岡を形成した基軸は教育事業である。九州帝国大学は1919（大正8）年に農学部、1924（大正13）年に法文学部を設置して、総合大学となった。また、1916（大正5）年には西南学院が、1920（大正9）年には福岡高等学校と九州歯科医学専門学校が、1922（大正11）年には福岡県立女子専門学校が次々と開校した。教育機関の充実により福岡市は多くの学生が闊歩し学ぶ街となった。さらに1912（大正元）年に九州劇場が設立され、1913（大正2）年には福岡市共用文庫の利用が始まっている。福岡で初めての映画常設館世界館も1913（大正2）年に設立された。1917（大正6）年には福岡記念館と通俗博物館がそれぞれ開館している。

## (2) 大正期のキリスト教会

キリスト教各派は明治期に福岡・博多における活動に着手した。それらはいずれも小規模であり、教会活動を主要な活動要素としていた。その後、福岡は近代化を進め市域を拡大したが、キリスト教各派は地域社会にあってどのような存在であったのか。ここでは教会活動に焦点を合わせ、教派ごとに概観する。

福岡組合基督教会は1906（明治39）年2月に中村正路牧師（在任 1906-39）を迎える。彼の活動によって教会は活気を帯び、1909（明治42）年に自給独立する。1926（大正15）年には新会堂のための土地を大字下警固宇沖田（現在の「福岡市中央区警固」）に求め、1927（昭和2）年4月にまず牧師館と仮会堂



の献堂式を行った。1929（昭和4）年には会堂を建設して、献堂式を行っている。統計によると1929（昭和4）年当時「現住会員123，礼拝出席46」である。

日本メソヂスト福岡教会は1888（明治21）年に天神町にあった福岡英和女学校の隣接地に会堂を建設し、捧堂式を行った。1913（大正2）年には自給独立し、1915（大正4）年から津屋崎（現在の「福津市」）と前原（現在の「糸島市」）で伝道活動をしている。いずれも後には教会を設立した。1919（大正8）年の統計によると、「現在会員126 朝礼拝出席者約100名」である。1925（大正14）年には、天神町に新会堂の献堂式を行っている。

日本聖公会アルパ教会は、1906（明治39）年に大名町（現在の（福岡市中央区大名））に新しい会堂を建設し、献堂式を行った。1910（明治43）年に九州地方部の仮大聖堂となり、教会名称を「日本聖公会 アルパ仮大聖堂」と改称した。教会が自給独立したのは1917（大正6）年4月であり、この時九州地方部の監督の座席を辞退したので、教会名称は「日本聖公会 福岡アルパ教会」に復帰した。

大名町カトリック教会は2代主任司祭 A. ルッセル（在任 1890-92）の在任期間に27名が洗礼を受けた。また、1892（明治24）年頃に大名町（現在の「福岡市中央区大名」）に教会土地を購入している。3代司祭 E. ベレール（在任 1892-1919）の在任期間である1896（明治29）年に赤レンガの聖堂とフランス式木造2階建ての司祭館を建設した。赤レンガの会堂は福岡では初めてのレンガ建て建築物であった。1926（昭和2）年には大名町カトリック教会で福岡カ



図4 日本メソヂスト福岡教会  
教会堂（1925年献堂式）  
（福岡中部教会百年史編集委員  
会編『福岡中部教会百年  
史』口絵28頁所収）



図5 大名町カトリック教会 教会堂（1896年献堂式）  
（大名町教会史編集委員会編『大名町教会百年史 1887-1986』口絵所収）

トリック青年会を発足し、青年活動を展開した。

福岡浸礼教会は、教会隣接地を購入して会堂建設に着手し、1908（明治41）年5月に献堂式を行った。土地購入費を含めた会堂建設費は9,314円35銭である。1912（明治45）年には福岡バプテスト教会規約を制定した。これは単独教会が制定した規約であって、教会の運用を定めている。1917（大正6）年度の報告によると、「現住会員 44，礼拝出席 朝50， 晩27」である。なおバプテスト派は1922（大正11）年，西南学院バプテスト教会を西新（現在の「福岡市早良区西新」）に設立している。

日本基督教会福岡教会は、大正期に比較的短期間に牧師が交代している。次の通りである。荒木宗孝（在任1910-14），高崎能樹（1915-17），記本貞次（1918-20），藤田治芽（1921-31）。藤田在任中の1928（昭和3）年に市内大字新開（現在の「福岡市中央区渡辺通」）に教会土地を購入し，翌年建築に着手した。献堂式を行ったのは1930（昭和5）年である。藤田は献堂式の翌年1931（昭和6）年に教会を辞任し，日本基督教会福岡城南教会（現在の「日本キリ

スト教会 福岡城南教会」) を設立し、初代牧師に就任した。

日本福音路帖福岡教会は1909(明治42)年に博多ルーテル教会青年会を発足して青年会活動を盛んにした。また、同年より鐘崎・折尾・直方への伝道活動を始め、鐘崎と折尾には説教所を設け、直方には後に教会を設立している。1915(大正4)年に市内上市小路(現在の「福岡市博多区中呉服町」)に教会土地を購入し、1916(大正5)年に献堂式を行っている。なお、1923(大正12)年に福岡福音ルーテル教会と教会表記を改称している。

大正期のキリスト教会に共通して認められる顕著な特質がある。まず会堂の建設である。福岡組合基督教会・日本メソヂスト福岡教会・日本聖公会アルパ教会など、いずれの教会も大正期あるいはその前後に新しく購入した土地に会堂を建設している。しかも、日本メソヂスト福岡教会・日本聖公会アルパ教会・大名町カトリック教会・福岡福音ルーテル教会などは、福岡・博多の中心部に堂々とした会堂を建てている。また、福岡組合基督教会・日本メソヂスト福岡教会・日本聖公会アルパ教会など、この時期に自給独立した教会が多い。教会統計から、福岡組合基督教会・日本メソヂスト福岡教会・福岡浸礼教会では、この時期の会員数や礼拝出席者数がかかる。それらは大正期に諸教会が安定した教会運営を営んでいた様子を伝えている。したがって、日本メソヂスト教会・日本路帖福岡教会などは地域の拠点教会となり、近接地への伝道活動を盛んに行った。これらの諸特質は大正期にキリスト教会が地域社会で一定の信頼と立場とを獲得していた事情を語っている。

### (3) キリスト教の文化的展開

キリスト教はすでに明治期において教育・建築などの分野で文化的活動を行っていた。それらを端緒としてさらに広範な文化的展開を大正期には示している。そのために福岡・博多の人々は様々な文化的表現を通してキリスト教と触れていた。

まず、教育事業である。1885(明治18)年に日本メソヂスト教会が因幡町に設立した福岡英和女学校は、1888(明治21)年天神町に1,054坪の校地を得て



図6 創立当時の教職員と学生 西南学院（1916年）  
（西南学院学院史企画委員会編『西南学院七十年史 上巻』280頁所収）

移転した。さらに1919（大正8）年には南薬院（現在の「福岡市中央区薬院」）に12,000坪の土地を得て移転している。当時の教育課程は「高等普通科5年，英文専門科3年」であり，高等普通科の科目は次の通りであった。「修身・国語・英語・歴史地理・数学・理科・図画・家事・裁縫・音楽・体操」<sup>9)</sup>。1919（大正8）年には福岡女学校と改称し，1925（大正14）年の在校生は299名である。バプテスト派は1911（明治44）年に大名町（現在の「福岡市中央区舞鶴」）に福岡バプテスト夜学校を開設し英語や聖書などを教えていたが，1916（大正7）年同地に男子を対象とした中学校である西南学院を設立した。開設時の生徒数は104名である。なお，西南学院は1917（大正8）年に西新（現在の「福岡市早良区西新」）に移転している。幼児教育では福岡福音ルーテル教会が1913（大正2）年大乗寺前町（現在の「福岡市博多区上川端町」）に南博幼稚園を設立した。南博幼稚園は1918（大正7）年には竹若町（現在の「福岡市博多区冷泉町」）に移転した。博多の町にある「洋風の園舎」であった。バプテスト派も1914（大正3）年に舞鶴幼稚園を荒戸町（現在の「福岡市中央区荒戸」）に開設している。福岡福音ルーテル教会はまた1918（大正7）年に英

語夜学会を開設している。当初の入会者は60名を数えた。神学教育ではイギリス教会宣教会（CMS）の宣教師である A. リー（Lea, Arthur 1868-1958）が、1915（大正4）年に福岡の司教宅で始めた教役者養成所がある。当初は私塾的な存在であったが次第に学生数も増え CMS の援助もあって、1920（大正9）年には文部省が認可する福岡神学校となった。神学校は福岡アルパ教会内に設けられた。

次に教会建築である。キリスト教にとって会堂は礼拝を初めとした信仰生活を営む建築物であるだけでなく、彼らは会堂の形にキリスト教信仰を表現する。そこで、各派は彼らの財と知恵を尽くしてふさわしい会堂を建築した。大正期の福岡・博多の町は至る所にキリスト教会堂が建ち、それらは町の新たな装いを示していた。大正期あるいはその前後に福岡市に建っていたキリスト教の会堂は次の通りである。なお、所在地は現在の住所表記である。

福岡組合基督教会 1929（昭和4）年献堂式 中央区警固2丁目11-20

「これが即ち現在の鉄筋コンクリート建会堂であって建築師中村鎮の設計にかかり、田中忠雄がその施行監督の任に当たった。」<sup>10)</sup>

日本メソヂスト福岡教会 1925（大正14）年献堂式 中央区天神

日本聖公会アルパ教会 1906（明治39）年献堂式 中央区大名2丁目

「道路に沿って赤レンガの土台のある鉄柵があり、会堂は平家であったが床が高く数段の石段を登って玄関になっていた。ガッチリとした構えでさすがに九州の大本山と言った威容を示していた。」<sup>11)</sup>

大名町カトリック教会 1896（明治29）年献堂式 中央区大名2丁目7-7

「洋風赤レンガ造りのこの美しい会堂は、当然市民の注目を引くこととなり、彼らのキリスト教に対する反抗的な気持ちを和らげ、宗教的無関心をただすのに少なからぬ役割を果たすことになった。」<sup>12)</sup>

福岡浸礼教会 1908（明治41）年献堂式 中央区大手前2丁目あたり

日本基督教会福岡教会 1930（昭和5）年献堂式 中央区渡辺通り4丁目5-1

福岡福音ルーテル教会 1916（大正5）年献堂式 博多区中呉服町1あたり

「この新会堂はイギリス風のハーフトィンバースタイルの赤レンガ建築で、教会にはめずらしく立派な築山、池が前庭にあり、徳川時代に築庭された伊藤小左衛門の茶室の庭がそのまま利用された豪壮なものであった。」<sup>13)</sup>

最後に教育と建築物以外の文化的活動を概観する。まず社会的活動であるが、その中に災害にあった地域社会に対する救援活動がある。1909（明治42）年、「東北地方を襲った大飢饉」に対して福岡浸礼教会の婦人会が立ち上がり、「婦人会員は一斉に総動員して教会関係のみならず殆ど市内の全地域に亘り戸別訪問をなして同情を仰ぎ、尊き結晶たる同情袋711袋、同情金16円51銭を被災地に送りだし」<sup>14)</sup>ている。1923（大正12）年の関東大震災に際しては、日本メソヂスト福岡教会と福岡福音ルーテル教会が救援活動に参加した記録を残している。社会的活動には社会浄化活動もあった。日本メソヂスト福岡教会は1924（大正13）年10月に「矯風会廃娼運動に対しても協力をし名士を招いて講演会を」開いている。この時の講演会には暴漢20数名が乱入し、司会者と講師は重傷を負い、流会となった<sup>15)</sup>。次に音楽活動がある。キリスト教では礼拝において音楽が重要な役割を果たしている。そこで、教会音楽が発展した。日本メソヂスト福岡教会では1913（大正2）年の様々な集会において「スミスは集会毎に集会の音楽指導および独唱を以て奉仕した」。福岡福音ルーテル教会では1921（大正10）年に「北支飢饉救済」を目的として「教会主催の慈善音楽会」を開き「純益金三百円を東京基督青年会同盟」へ送っている。さらに料理教室などがある。バプテスト派では週2回、「西洋料理の講習会をはじめた。…約40-50名の婦人が集まった」<sup>16)</sup>。また、福岡福音ルーテル教会は1925（大正14）年に「山陰地方大震災義捐」を目的に「教会婦人会のバザー」を開いている。

大正期の福岡は教育・建築・社会的活動など多彩なキリスト教文化活動が営まれた町であった。人々は文化を通して日常的に様々な形でキリスト教と出会っていた。キリスト教は根源に宗教的要素を持つ文化においても人々に語りかけていたのである。

## おわりに

日本政府は明治・大正期に近代化を強力に推進した。そのために日本社会は様々な分野で重要な変革を経験した。本稿は近代日本社会に生じていた変革に注目し、それを明治・大正期の福岡とキリスト教において考察した。

そこで明らかになった一つのことは近代福岡とキリスト教に関する研究史に関してである。それらのほとんどは2種類に大別できる。キリスト教教会史とキリスト教学校史である。要するにこれらは教会にしても学校にしても歴史の区切りにおいて歴史によって自らの存在を再確認しようとした営みである。なるほど、福岡の近代化と他教会の動向を踏まえた教会史（博多ルーテル教会80年史編集委員会『博多ルーテル教会八十年史』）や近代日本の教育史を踏まえた学校史（『福岡女学院七十五年史』学校法人福岡女学院発行）がある。しかし、それらにしても主要な叙述は編集目的から限定され、個別教会史や学校史の歩みになっている。

このような先行研究に対して本稿は明治・大正期の福岡とキリスト教全般の概説を目的とした。そのため、個別団体史叙述の持つ限界を越えて更に広く把握し、それを表現することができた。そこで明らかになったのは、近代の福岡・博多においてキリスト教が様々な形で意外に深く人々の市民生活に浸透していた事実である。

なお、本稿は全体の概観に目的をおいたため個別のテーマに立ち入ることはできなかった。個別研究の可能性として次のようなものがある。「福岡における自由民権運動とキリスト教」「近代福岡におけるキリスト教教育の実際とその意味」「福岡の教会建築に表現されたキリスト教」「大正デモクラシーの福岡における展開」などである。これらはいずれも興味深く、キリスト教史研究の成果によって近代福岡の一面を明らかにする研究でもある。今後の研究に期待したい。

## 注

- 1) 「記事五十五 日本における一年一変化 J.D. デイヴィス牧師 (1873年4月号)」  
(塩野和夫『禁教国日本の報道』185-188頁)
- 2) 宮崎克則編『古地図の中の福岡・博多』8-9頁
- 3) 日本聖公会は1887年に組織されたが、これにアメリカ監督教会宣教会・イギリス教会宣教会・イギリス海外伝道協会が協力した。
- 4) 「五月一日付 九州臨時裁判御処刑前号ノ続」(『筑紫新聞』第十六号, 明治十年五月十日, 3-7頁)
- 5) 「筑前福岡並に三巡行記」(『七一雑報』明治12年1月3日, 5頁)
- 6) 福岡市役所編『福岡市史 第一卷明治編』1544頁
- 7) 読売新聞社西部本社編『福岡百年史(上)』150頁
- 8) 日本基督教会柳川教会編『日本基督教会鎮西中会記録 明治14年(1881) - 昭和18年(1943)』51頁
- 9) 『福岡女学院七十五年史』学校法人福岡女学院発行, 23頁
- 10) 上原三郎他編『福岡警固教会八十年』9頁
- 11) 『福岡東城橋教会八十年を顧みる』日本基督教団福岡東城橋教会, 5頁
- 12) 大名町教会史編集委員会『大名町教会百年史 1887-1996』60頁
- 13) 博多ルーテル教会80年史編集委員会『博多ルーテル教会八十年史』67頁
- 14) 『日本基督教団福岡城北教会五十年小史』12頁
- 15) 福岡中部教会百年史編集委員会『日本基督教団 福岡中部教会百年史』80-81頁
- 16) 西南学院学院史企画委員会編『西南学院七十年史 上巻』237頁

## 主要参考文献

- 植木園二編『筑紫新聞』弘聞社  
村上俊吉他編『七一雑報』雑報社  
日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館, 1988  
宮崎克則編『古地図の中の福岡・博多』海鳥社, 2005  
福岡市役所編『福岡市史 第一卷明治編』福岡市役所, 1963  
福岡市役所編『福岡市史 第2巻大正編』福岡市役所, 1963  
読売新聞西部本社編『福岡百年史(上) 幕末から明治へ』浪速社, 1967  
読売新聞西部本社編『福岡百年史(下) 日露戦争から昭和へ』浪速社, 1967  
折居正勝他編『図説 福岡・宗像・糸島の歴史』郷土出版社, 2008  
上原三郎他編『福岡警固教会八十年』日本基督教団 福岡警固教会, 1965  
福岡警固教会百年史編集委員会編『福岡警固教会百年史(1)』日本キリスト教団福岡警固教会, 2010



- 海老沢有道『明治維新とキリスト教』新生社，1968
- 福岡中部教会百年史編集委員会編『福岡中部教会百年史』日本基督教団福岡中部教会，1985
- 福岡女学院 75 年史編集委員編『福岡女学院七十五年史』福岡女学院，1961
- 『福岡城東橋教会八十年を顧みる』日本基督教団福岡城東橋教会，1970
- 日本聖公会歴史編纂委員会編『日本聖公会百年史』日本聖公会教務院文書局，1959
- 大名町教会史編集委員会編『大名町教会百年史 1887-1986』大名町カトリック教会，1986
- 『日本基督教団福岡城北教会五十年小史』（1943）
- 日本バプテスト西部組合編『日本バプテスト西部伝道略史』福音書店，1922
- 枝光泉『宣教の先駆者-日本バプテスト西部組合の歴史-』ヨルダン社，2001
- 西南学院学院史企画委員会編『西南学院七十年史 上巻』西南学院，1986
- 日本基督教会柳川教会編『日本基督教会鎮西中会記録 明治十四年（1881）-昭和十八年（1934）』新教出版社，1980
- 福岡渡辺通教会開設 100 年史編纂委員会編『福岡渡辺通教会開設百年史』日本基督教団福岡渡辺通教会長老会，1994
- 博多ルーテル教会 80 年史編集委員会編『博多ルーテル教会 80 年史』日本福音ルーテル博多教会，1989
- 福山猛編『日本福音ルーテル教会史』ルーテル社，1954